

パーソナリティ理論

長谷川明弘(金沢工業大学)

パーソナリティの理論概説

■ パーソナリティの定義

パーソナリティ(personality)とは、ある個人の行動は環境への適応において、その人らしい独自の一貫した適応行動様式があり、たえず遺伝と環境の相互作用により、変化、発達して再体制化されていくものである。

一貫性と安定性を持つこと

個人の行動に表れる感情や意志の特徴であること

cf.オルポートは「パーソナリティとは、個人のうちにあつて、その個人に特徴的な行動や思考を決定する心理物理的体系の力学的体制である」と1938年に定義している。

■ 類型論と特性論

類型論はドイツ、フランスで発展した。典型的な型に分類して整理する。全体から個を理解する。質的な理解をする。

特性論は、イギリス、アメリカで発展した。構成されている基本単位(特性:trait)に分類する部分から全体を理解する。客観的・量的な測定を可能にした。

※類型論と特性論は対立するものではなく相互補完するもの。

類型論

クレッチマー

分裂気質、躁うつ気質、粘着気質といった3つの性格類型になる。

ユング

外向型と内向型といった2つ型と4つの機能類型：思考、感情、感覚、直観
つまり8つの性格類型になる。

その他の類型論

特性論

因子分析によって一段と発展した。

因子分析とは、変数間の背後にあると想定される構成概念を探索する分析手法のこと。

キャッテル

12の根源特性(p171)

アイゼンク

神経症者の研究から2つの基本因子を抽出した。

内向-外向の因子、神経症傾向の因子

5 因子論(ビッグファイブ)

1)外向性、2)協調性、3)良心性(誠実性)、4)情緒的安定性、5)文化

■代表的な性格の諸理論

精神分析理論

構造論、力動論、発達理論

行動論的理論

社会的な学習と条件付け

現象学的理論

人間性、人格構築理論

性格構築理論(personality constructs theory)

性格といわれている事柄は、見ている人がその見られた人の行動といった現象をその見ている個人自身が概念化して構築したものに過ぎない。Kelly,G.A.,1955

性格は、固定されたものではない。

性格は、人と人の中で構成されるという考え方

ブリーフセラピー(p.76)の性格理論として紹介されることがある。社会構成主義

■パーソナリティの形成と変容

パーソナリティ形成の諸説

生得説、経験説、輻輳説、層理論、環境閾値説など

双生児による研究

双生児法から感受性、活動性、固有気分、心的テンポに遺伝規定性を認める。

パーソナリティの発達

精神分析学のフロイトによる理論

リビドー(広義の性本能、生きるエネルギー)が身体の部位に発現する時期によって区分
口唇期、肛門期、男根期、潜在期、性器期

サイモンズによる親の養育態度との関連

支配-服従、保護-拒否という二次元で母親の養育態度を考えた。

ロジャーズのパーソナリティ変容理論

パーソナリティ変化の必要十分な6つの条件 (p.63)

実現傾向(元来その人が持っているその人らしさ)を活かす条件のこと。

カウンセリングは、相談に来た人(クライアント)がありのままの自分に気づき(自己洞察)、それを受け入れ(自己受容)、問題を解決しようと決心(自己決定)するプロセスに寄り添って支援していくこと。

■心理学研究法

研究法の分類

心理学は、心がどんなものであるのかをわかる(知る)ために様々な工夫してきた。

心理学は、行動の科学である。

科学とは、現象を理解・説明・予測・制御する方法である。科学原則とは、単純性、整合性(一貫性)・論理性、反証可能性、実証性、再現性のこと。

- | | | | |
|---------------|-------|-----------------|---------------|
| 1) 観察によるもの | みること | 観察法 | 自然的観察法/実験的観察法 |
| 2) 言語を媒介にするもの | あうこと | a) 面接法 | 非構造化/半構造化/構造化 |
| | きくこと | b) 調査法・質問紙法・検査法 | |
| 3) 実験によるもの | ためすこと | 実験法 | |

文化とパーソナリティ

発達とライフサイクル

発達とは、受胎・発生から死に至るまでの、個体の量的および質的な変化過程のこと。

生涯発達(life-span development)

誕生、胎児期、乳児期、幼児・児童期、青年期、成人期、高齢期

一方向性ではない

発達段階

研究者は、発達過程(身体的成長、思考・知能、道徳性など)をいくつかの段階に区分することを試みてきた。発達は、基本的に連続的である。

発達の特徴を直感的に捉えやすくするため

ある機能の発達を理解しやすくするため

代表的な研究者としてシュトラッツ、フロイト、ピアジェ、コールバーグ、エリクソンなどある時期のある特定の機能の特徴が、前後の特徴と変化が異なる場合(非連続)に一つの段階として区分。

発達課題

発達課題とは、ある発達段階に、達成しておかなければならない発達の技能(心身の諸機能、技術、知識、態度など)のこと。社会的共通課題。ハヴィガーストが 1952 年に発達課題(developmental task)と命名した。身体成熟、社会・文化、個人の願望や価値観

発達とパーソナリティ

青年期の特徴

レヴィン 青年を周辺人(境界人)と呼んだ。

ハヴィガーストの発達課題

エリクソンの発達課題

信頼対不信、自立性対恥・疑惑、積極性対罪悪感、生産性対劣等感、

自我同一性対同一性拡散、親密さ対孤立、生殖性対停滞、完全性対嫌悪・絶望

エリクソンは、モラトリアム(執行猶予期間)という経済用語を心理学の用語に用いた。

成人期・中年期の特徴

ユングのライフサイクル論

4 段階(少年期、成人前期、中年、老人)に分けて太陽の運行にたとえた。

少年期と老年期は問題のない時期と考えていた。

中年期を「人生の午後」と呼び、「個性化」とは自己を見つめて新たな自己を取り入れること。

レビンソン

中年 80%が中年の危機を体験することを報告した。

オルポートによる成熟した人格

1)自我の拡張、2)他人に対する温かい関係、3)情緒安定

4)現実認知と技能、5)自己客観化、6)人生観の確立

課題と危機

ストレスと疾患

老年期の特徴

欲求、関係の持ち方

社会・文化とパーソナリティ

パーソナリティと文化

マーガレット・ミードの研究

3部族の特徴・

パーソナリティと性差

葛藤の理論と欲求不満の反応様式

葛藤(conflict)の理論

接近-接近型(どれか迷う)、回避-回避型(どれも嫌だ)、接近-回避型(どちらが良い)

欲求不満の反応様式

攻撃的反応(攻撃の対象や方法が身体、言語、間接、転移、自己など)

退行的反応(未熟で未分化な発達段階に後戻りすること)

固着的(固執的)反応(無意味で柔軟性のない反応。反復的な爪かみなど)

欲求不満耐性(frustration tolerance)

ローゼンツヴァイクの概念。欲求不満状態に耐え、乗り越える能力のこと

防衛機制(防衛機構) defense mechanism

不安や抑うつ、緊張、衝動や情動からおきる葛藤、罪悪感、恥といった不快な感情を相対化して対処可能な水準に変容させる心理的作用のこと。フロイトが提唱した概念。

逃避(escape)：空想、病気、現実、自己へ消極的に逃れる。逃げるも一手

抑圧(repression)：苦痛な感情や欲動、記憶を意識から閉め出す。臭いものに蓋。

投影・投射(projection)：相手へ向かう感情や欲求を、他人が自分へ向けていると思う

同一視(identification)：相手の属性を自分のものとして、自己の評価を高めようとする

反動形成(reaction formation)：自分の本心とは全く裏腹の言動をする。弱者が威張る

合理化・理屈づけ(rationalization)：もっともらしい理屈をつけて自己を正当化する。

補償(compensation)：劣等感を他の分野や他の方向で補う。野球で負け、サッカーで勝つ

昇華(sublimation)：抑圧された欲求や感情が社会的に認められる価値ある活動として置き換えて発現する

置き換え(displacement)：欲求が阻止されると、要求水準を下げて代理満足させる。妥協すること

摂取・取り入れ(introjection)：相手のものを取り込んで自分のものにする。真似。相手にあやかる。同一視の前段階と考えられている。

否認(denial)：不安・苦痛に関連する現実を否定し、不快な体験を認めないようにする。

■参考・引用文献

詫摩武俊他 2003 性格心理学への招待(改訂版) サイエンス社

日本産業カウンセラー協会(編) 2008 産業カウンセリング 改訂第5版 (社)日本産業カウンセラー協会

前田重治 1985 図説臨床精神分析学 誠信書房